

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05934

研究課題名（和文）19-20世紀のフランス哲学の動向に対する古代哲学研究の影響に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Influence of Ancient Philosophical Studies on Trends in French Philosophy in the 19th and 20th Centuries

研究代表者

近藤 和敬（Kondo, Kazunori）

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授

研究者番号：90608572

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、主に20世紀のフランスにおける古代哲学研究が、同時代のフランス哲学にどのような影響を与えたのかを明らかにする研究である。この課題にたいして、19世紀から続く、フランスの哲学史研究の歴史を参照しつつ、そこにおける関心やトピックの変化を、特にドイツ哲学や文献学の研究状況との関係のなかで確認していった。さらには、同時代の哲学研究との関連について、とくに科学認識論の文脈における古代哲学への関心の高まりを、ポール・タンヌリ、ガストン・ミヨールの研究において確認した。また、戦後のフランス哲学における影響として、ドゥルーズ、シモンドン、バディウについてそれぞれ明らかにし、論文、著作、翻訳を公にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果は、論文などのほかに、それをまとめた論文集として『内在の哲学——ドゥルーズ、カヴァイエス、スピノザ』（青土社、2019）という形で世に問い、いくつかの書評においてその意義を確認された。現代フランス哲学という文脈における研究成果ではあるものの、同時代の哲学史研究との関係を明らかにしようとするものであり、哲学史研究一般がいかんして現代哲学という形で異なる影響関係に入り込むことが可能であるのかを示すという点においては、看過されがちな基礎的な哲学史研究の本来の意義を確認することを促すという意味において、重要な社会的意義を認められうるのではないかと考えている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify how the study of ancient philosophy in France in the 20th century influenced the French philosophy of the same period. For this task, I refer to the history of the study of the history of philosophy in France since the nineteenth century, and confirm the changes in interest and topics, especially in relation to the state of research in German philosophy and philology. Furthermore, the growing interest in ancient philosophy, especially in the context of scientific epistemology, has been confirmed in the work of Paul Tannery and Gaston Milhaud in relation to the philosophical studies of their contemporaries. This study also reveals the influence of ancient philosophy in Deleuze, Simondon and Badiou on post-war French philosophy.

研究分野：哲学

キーワード：フランス哲学 現代哲学 哲学史 フランス科学認識論 古代哲学 ドゥルーズ シモンドン バディウ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

前世紀の哲学は、現代哲学という同時代的なあり方から徐々に哲学史の研究対象へと変転し、様々な観点から見直しが進められている(渡邊二郎監修『現代の哲学 西洋哲学史二千六百年の視野より』昭和堂、2005年)。フランス哲学もその例にもれず、国内では申請者を分担者とする科研費助成事業「フランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ」(上野修代表)が、エピステモロジー(以下科学認識論)を中心に見た20世紀のフランス哲学と、当時のスピノザ研究の動向がいかに影響を与えあっているのかを明らかにしつつある。また国外を見ても、**Knox Peden, *Spinoza Contra Phenomenology: French Rationalism from Cavailles to Deleuze*, Stanford University Press, 2014**のように、ドゥルーズ等に見られる20世紀後半のフランス哲学の成立背景に、ブランシュヴィック、カヴァイエス、ドゥサンティ、ゲルーなどの知られざる系譜の議論があり、その観点から現代哲学の議論を批判的に再構成しようとする研究が出始めている。

## 2. 研究の目的

これまでに申請者は、20世紀フランス哲学のあまり知られていなかったフランス科学認識論の側面に思想史研究の光を当てるべく、『構造と生成Ⅰ カヴァイエス研究』(月曜社、2011年)、『構造と生成Ⅱ 学知の理論と論理学について』(月曜社、2013年)や『エピステモロジー 20世紀のフランス科学思想史』(慶応大学出版会、2013年)などでカヴァイエスやグランジェなどの哲学を検討、紹介してきた。また平成24年度～平成25年度の科研「フランス科学認識論の成立にかんする思想史および文化・社会史の複合的研究」(申請者代表)では、カヴァイエスを中心に、20世紀前半のフランス科学認識論とその文化的・社会的背景の関わりについて研究し、その結果として、カヴァイエスの哲学が、高等師範学校の哲学教授資格試験の復習教師という彼の特殊な制度的身分によって、多種多様な後人の哲学者たちに影響を与えていただけでなく、カヴァイエスの宗教的活動や政治的活動を通して、哲学以外の分野とも彼の思想が連続している様子を明らかにすることができた。これによって、例えば古代哲学研究者であるエミール・ブレイエとカヴァイエスの哲学の意外な関連性や、社会学者のセレストン・ブーグレの社会主義思想とカヴァイエスの政治思想との連続性などを指摘することができた。加えて、申請者が分担者として参加している科研プロジェクトである「フランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ」では、ブランシュヴィックに始まるフランスでのスピノザ哲学研究の隆盛とフランス科学認識論(カヴァイエス、ドゥサンティ、ヴェイユマン、アルチュセール、カンギレム、フォーコー、ラカン、ドゥルーズ)のあいだの隠れた紐帯を明らかにしつつある。特に、この研究の一部として申請者は、論文「エピステモロジーの伏流としてのスピノザ、あるいはプラトン」において、フランス科学認識論の成立を考えるうえで、1908年に開講した「厳密科学との関係における哲学講座」、そしてその発展形とみなされる「科学技術史研究所」の設立が制度上で重要な役割を果たしており、とくにそこにおけるガストン・ミヨールの古代哲学研究が重要であることを示唆した。また論文「ドゥルーズはシモンドンの議論をいかに理解し使用したか ドゥルーズの忠実さと過剰さ」において、シモンドンの技術論がプラトン哲学にその重要な源泉を持つことを指摘したが、そこでも重要な役割を果たしているのが、彼らより一世代前 **P. = M.** シュールのプラトン哲学の解釈であることを見た。

以上の研究成果によって、20世紀前半のフランス科学認識論の哲学的な解明のためには、ひいてはそれと強い結びつきをもつ現代フランス哲学の全体を哲学的に新たな観点

から解明するためには、当時およびその前後におけるフランスの古代哲学研究の内実を理解することがきわめて重要な意味をもつことが強く示唆された。しかし問題なのは、国内外を問わず、フランスにおける古代哲学研究の歴史それ自体が、現代哲学史の文脈で検討されることは、これまでまったくと言ってよいほどなかったことである。確かに当該の研究は、文献学や古代哲学研究の分野において参照され、検討されてきた。しかし、それが現代哲学史の文脈で他の現代哲学と関連付けられるなど、現代哲学史の観点から検討されてはこなかったことに問題がある。本研究はこの欠落を埋めるべく単に、フランスの古代哲学研究史に注目するだけでなく、それが現代哲学のなかでどのように生かされているのかという観点からその関係の全体を解明することを目的とする。

### 3. 研究の方法

申請者はこれまで現代フランス哲学をフランス科学認識論の文脈から明らかにする研究を行ってきた。その成果によって、現代フランス哲学のさらなる思想史的解明のためには、**20**世紀前半を中心としたフランスにおける古代哲学研究の成果を当時の現代哲学がどのように受容し、また逆に当時の現代哲学を古代哲学研究の側がどのように受け取っていたのかを明らかにすることが喫緊の課題であることが示唆された。しかし、これまでの国内外の現代哲学史研究において古代哲学研究の成果を関連付ける研究はほぼ皆無である。本研究ではこの欠落を埋めるべく、**20**世紀のフランス科学認識論を中心に、フランス現代哲学における古代哲学研究の受容と関連性について文献的方法を用いて、思想史的・制度史的な解明を目指す。

そのため本研究は、大きく分けて四つの部分課題から構成される。以下ではその課題に番号を付して区別する。

- (1) **19**世紀のフランス哲学研究における古代哲学研究の導入の背景およびその議論枠組みの調査。
- (2) **20**世紀前半のフランスにおける古代哲学研究の文献学的調査。
- (3) **20**世紀後半のフランス哲学における古代哲学研究の影響の文献学的調査。

(1)については、ヴィクトール・クーザン体制下から共和政期初期までにおけるフランスにおける哲学史研究の状況を当時の文献から確認する。主に、クーザン、ラヴェッソン、ブトラーなどの文献を中心に研究を進める。

(2)については、ヴィクトール・プロシャール、レオン・ブランシュヴィック、レオン・ロバンらの文献を中心に研究を進める。

(3)については、**20**世紀後半には含まれないが、ロトマン、そして後半に含まれるものとしてドゥルーズ、シモンドン、バディウのそれぞれについて研究を進める。

### 4. 研究成果

#### 19世紀フランス哲学における古代哲学の関心の変遷について

**19**世紀前半のフランス哲学における哲学史研究にはドイツでの先行する哲学史研究からの影響が大きく見られる。のみならず、クーザンがドイツ哲学の影響を受けながら、また同時代のイギリス哲学の影響を受けながら、それらとは異なる独自のフランス哲学を立ち上げなければならないという要請のなかで折衷主義の立場を立てる。その結果、哲学史研究もその立場を正当化しようという意図に若干導かれることになる。古代哲学にかんする批判

的な文献学的研究の登場は、ヘーゲル哲学以後の哲学史研究を待つことになり、フランスでこの成果を積極的に導入することになるのが、エミール・ブトルーであった。ブトルー以後、主にドイツを中心に進む批判的な文献学的哲学史研究の水準をフランスに導入する仕事が、ヴィクトール・プロシャール、ヴィクトール・デルボラによって進められることになる。

#### 古代ギリシア科学史の成立とドイツ実証史学との関係について

一方、19世紀後半、ドイツでは古代数学史、古代科学史の文献学的研究も始まる。この動向をいち早くフランスに導入し、自らもまたギリシア語およびラテン語の文献の考証学的研究を開始するのが、ポール・タンヌリであった。彼の手によって、古代ギリシア、ヘレニズムの数学および科学が、当時の偏見とは異なり、極めて高度かつ厳密なものであったことが明らかにされると同時に、その内容の豊かさと同時に当時の古代哲学への影響が注目されるようになる。この観点を引き継ぐことのないのが、後に「厳密科学との関係における哲学講座」の教授となるミヨーであった。ミヨーもまたタンヌリ同様、数学科の出身だがとくにタンヌリが開拓した、古代科学と哲学との関係の問題に惹かれるようにして哲学へと転向することになる。ここに、古代科学史と古代哲学との最初の接点が置かれ、かつそこに後のフランス科学認識論の起点がおかれたことには大きな意味があるだろう。実際、この観点の延長線上に、ピエール・デュエムによる古代・中世哲学と天文学と物理学の絡み合いの歴史を明らかにした『世界体系』、トマス・クーンに大きな影響を与えたことで知られるアレクサンドル・コイレの中世・ルネッサンス期の哲学と科学との総合的な歴史記述へとつながっていくことになる。

#### 20世紀前半の状況

20世紀前半においては、古代哲学史研究と古代科学史研究、そしてそれらを横断する科学認識論的研究は相互に意識しあいながら進んでいった。それらを科学認識論のほうに集大成化したのがブランシュヴィックの『数理哲学の諸段階』(1912年)であったとみることもできる。また、ヘルマン・ワイルやハイゼンベルクのように、当時の新しい数学、幾何学、物理学の思想を理解するにあたって、近代合理主義ではなく、むしろ古代ギリシアにその範を求めようという機運もあいまって、新しい科学的認識の基礎にとって、近代以前の思想に活路を見出す動向も見いだされる。たとえば、ベルクソンは、新しい科学的認識を彼の求める心理学の方向性に見出し、この哲学のモデルをプロティノスなどの古代哲学に求めているように思われる。

#### 20世紀前半のフランス哲学への影響：ロトマン

また20世紀前半のフランスの数理哲学者であるアルベール・ロトマンは、20世紀前半のフランスの実証主義的な古代哲学研究者であったレオン・ロバンや、新カント派および現象学の影響下にあったドイツの古代哲学史研究を参照しつつ、そこでの哲学の枠組みを、1930年代の最先端の数学の認識論へと適用することを試みている。これは、先にみたワイルやハイゼンベルクらの動向を意識しつつ、古典的な認識枠組みの乗り越えの足掛かりとして古代哲学を参照する好例となっている。この点については、『アルベール・ロトマン数理哲学論文集』に所収の拙著「解説3 ロトマンの数理物理学の理解と20世紀初頭のフランス哲学史」を参照されたい。

## 20 世紀後半のフランス哲学への影響（1）ドゥルーズ

ドゥルーズは、前期後期のいずれにおいても古代哲学研究から多くを引き受けている。とくに、彼の先生でもあったピエール＝マクシム・シュール、モーリス・ド・ガンディアックらによる古代・中世哲学研究からは非常に多くの影響を受けていたものと思われる。また後期の主著のひとつであるガタリとの共著である『哲学とは何か』においては、古代哲学を哲学の「再領土化」の「過去形式」として重視しており、とくにそこにおける「内在平面」と「ポリス」という友愛の社会体との接続の重要性について、「地理哲学」の項において論じている。これら、特に前者については、拙著『内在の哲学 へ ドゥルーズ、カヴァイエス、スピノザ』（青土社、2019年）を、また後者については拙著『『哲学とは何か』精読 ドゥルーズとガタリの 内在 の哲学』（講談社、2020年予定）を参照されたい。

## 20 世紀後半のフランス哲学への影響（2）シモンドン

シモンドンの個体化の哲学は、根本的には、アリストテレスの個体概念の批判をベースにしている。しかし実際のところ、アリストテレス以後のすべての個体概念はアリストテレスのそれをベースにして変更を加えたものであり、シモンドンの批判はその全体を射程とするものであった。この点については、拙論「ジルベール・シモンドンの個体化の哲学にみるアインシュタインの影響：特異性・場の二重分節としての個体化とアラグマティックな関係」および、共訳の『個体化の哲学』（法政大学出版会、2018年）に活かされているほか、現在進行中の博士副論文「個体概念の歴史」の翻訳という形をとおして公にしていきたいと考えている。

## 20 世紀後半のフランス哲学への影響（3）バディウ

最後に、アラン・バディウもまた、フランスにおける古代哲学研究から多くを受け取っている現代哲学者の一人である。彼はとくに、自身の立場をプラトン主義として位置づけるが、それは通俗的な実在論の代名詞というよりも、プラトンと数学との関係および、アリストテレスにおける論理学と哲学との関係に注目しつつ、それを現代の枠組みにおいて再度捉えなおすことを試みたものだといえる。この点については、拙著『内在の哲学 へ ドゥルーズ、カヴァイエス、スピノザ』に所収のバディウに関する論文「メイヤスーとバディウ：真理の一義性について」および、20年度公刊予定の「アラン・バディウの哲学と数学の関係についての批判的考察—「概念の哲学」のポスト・カヴァイエスの展開の諸相という観点から」（『現代思想』予定）を参照されたい。またこれらの成果は、共訳『推移的存在論』においても活かされている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 近藤和敬	4. 巻 87
2. 論文標題 ドゥルーズが『差異と反復』で言及していた数学はどのようなものであったのか、そしてそこにドゥルーズは何をみていたのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 近藤和敬	4. 巻 47(10)
2. 論文標題 ジルベール・シモンドンの個体化の哲学にみるアインシュタインの影響：特異性-場の二重分節としての個体化とアラグマティックな関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『現代思想』	6. 最初と最後の頁 207-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近藤和敬	4. 巻 47(15)
2. 論文標題 かぞえかたのわからない巨大数は存在しないのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『現代思想』	6. 最初と最後の頁 161-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近藤和敬	4. 巻 47(1)
2. 論文標題 メイヤースとパディウ：真理の一義性について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青土社	6. 最初と最後の頁 87-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 近藤和敬	4. 巻 86
2. 論文標題 1890年代における「スピノザの道德」という主題設定について：デルボス、ブランシュヴィック、ウォルムス	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 近藤和敬	4. 巻 86
2. 論文標題 デルボス『大百科全書』項目「哲学」にみる実証主義に対する合理性の応答：20世紀初頭における自然科学と形而上学をとりまく文脈状況の探査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 近藤和敬	4. 巻 86
2. 論文標題 1870-80年代のイタリア実証主義とその周辺のスピノザ」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集	6. 最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 近藤和敬，野元達一	4. 巻 86
2. 論文標題 後期ドゥルーズ哲学における「脳」という問題設定についての試論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集	6. 最初と最後の頁 57-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 近藤和敬	4. 巻 85
2. 論文標題 金森修の科学思想史と哲学研究についての科学思想史の役割	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『人文学科論集』鹿児島大学法文学部紀要	6. 最初と最後の頁 99-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 近藤和敬	4. 巻 44(18)
2. 論文標題 「内在の哲学」序説 知性の問題論的転回	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 192-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 3件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Kazunori KONDO
2. 発表標題 An Archaeology of the Notion of the Immanence in Texts of Deleuze and Deleuze+Guattari
3. 学会等名 Deleuze Camp with Deleuze Conference in Asia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 近藤和敬
2. 発表標題 哲学と科学と芸術の共創を再開するために 後期ドゥルーズからベルクソンへ、外と直観 』『見果てぬ哲学 林達夫、中村雄二郎、市川浩、そして 第二部「来たるべき哲学」』
3. 学会等名 日仏哲学会前日公募型ワークショップ(招待講演)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 Kazunori KONDO
2. 発表標題 "Comment from epistemological view point"
3. 学会等名 新しい実在論ワークショップ: Hypertime: an inquiry into time in itself (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 近藤和敬
2. 発表標題 金森修の科学思想史と哲学研究にとっての科学思想史の役割
3. 学会等名 『日仏哲学会前日提案型ワークショップ 金森修の科学思想史とエピステモロジーのこれから』
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kazunori KONDO
2. 発表標題 'Desire and the other: From the viewpoint of a philosophy of immanence'
3. 学会等名 The 3rd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (CCPEA2016) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 近藤和敬	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 494
3. 書名 『内在の哲学 へ ドゥルーズ、カヴァイエス、スピノザ』	

1. 著者名 ジルベール・シモンドン、藤井 千佳世、近藤 和敬、中村 大介、ローラン・ステリン、橘 真一、米田 翼	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 638
3. 書名 個体化の哲学	

1. 著者名 アラン・バディウ、近藤和敬、松井久	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 256
3. 書名 推移的存在論	

1. 著者名 檜垣 立哉、小泉 義之、合田 正人、宇野邦一、小倉拓也、江川隆男、アンヌ・ソヴァニャルグ、小林卓也、国分功一郎、西川浩平、山森祐毅、堀千晶、千葉雅也、岡嶋隆佑、宇佐美達朗、堀江郁智、ダニエル・スミス、宮崎裕助、近藤和敬	4. 発行年 2019年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 512
3. 書名 ドゥルーズの21世紀(この内の、近藤和敬「思考 生 存在 バディウの批判から見るドゥルーズの後期思想」446-492)	

1. 著者名 上野修・米虫正巳・近藤和敬	4. 発行年 2017年
2. 出版社 以文社	5. 総ページ数 476
3. 書名 主体の論理・概念の倫理 20世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----